

自称「写真家」の言い訳

真崎 雄一



徳島・あびす連

物事の本質、事実、真実、実態を究めようとする習性は人間だけではありません。例えば、自称「写真家」の私は、マクロレンズに始まり望遠レンズから超広角レンズを用意し、被写体に近づいたり、離れたり、下から見上げたり、上から見下ろしたり、時には背後に回り込んだり、ともかく考えられる限りのあらゆる手段を試みます。画家は、風景を見る時、目を細めたりもします。料理家は手で触れ、匂いを嗅ぎ、口に含んで味をみます。総じて、それらの行為は観察をしていることではないでしょうか？ 問題は、そのみでは本質が解明できない場合のことです。

野球でいえば、松坂投手の豪速球も松井選手なら球が静止してみえるくらいに訓練されています。しかし、バッターはピッチャーの心理状態を

読み、次にくる玉筋の予想、推測も行っています。ということは物事の本質を究めるには観察のみならず熟考、洞察が、いかに大切かが理解されます。とはいうものの「バカな考え休みに似たり」で凡人たる私たちは、普通の訓練で洞察力を磨くことで補うしかありません。構造エンジニアである私の仕事も、時にはアカデミックな思考アプローチを必要とすることが多々あります。多々と弁明がましいのは、日常は仕事とお金に追われて真摯に取り組んでいるとはいえ反省が込められています。普通の自己研鑽による知識の吸収も然る事ながら、それよりも重要なことは別にあると思います。それは「知恵」です。知恵なくして創造的かつ芸術的仕事は不可能です。知恵は「直観力」と深く結びついていると思わ

れます。直観力は、豊かな「感性」が背景にあります。感性は物事の固定観念をなくし、常識にとらわれない、素直な気持ちで物事を受け取る、ビビット性が基本です。

知恵はまた「理性」ある人間の所産です。理性的人間とは、どういう人ですか？ それは「物事の本質を正しく見抜き、決断し、社会人として良識ある人」ではどうでしょうか。次に良識ある人間の生き方とは、どういうものなのでしょうか？ 多少の正義感を持って行動するが自己本位でなく、ほかを思いやりつつ時には笑い、時には目に涙する心根のある人の生き方ではないでしょうか？ まあ、こういう風に結論すればカメラをかついでうろろするの晩酌するのも女房に遠慮はいらない!!!

(次回は濱嶋 剛氏)

まさき・ゆういち

1943年7月30日生まれ 福岡県出身 62年福岡県立田川工業高等学校卒 同年日本セメント入社 現在、マサ建築構造設計室代表取締役 グレイブ代表取締役 JSCA編集委員 ソルバック協会理事 ASDO広報・会員委員長 千葉県指定住宅紛争処理委員 建築構造士 1級土木施工管理技士 木造住宅制震「GVA工法」および土のうによる地盤改良「ソルバック」の開発・普及に全力投球 共著に「赤れんが・迎賓館・議事堂小物語」 趣味は読書・カメラ・英語

